

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05609・19K20815

研究課題名（和文）日本の公立小学校における英語授業のインタラクション分析

研究課題名（英文）An analysis of interactions in English lessons in a Japanese primary school

研究代表者

志野 文乃（Shino, Ayano）

早稲田大学・教育・総合科学学術院・助手

研究者番号：00822199

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、「日本の公立小学校の教室内で、学級担任（HRT）、外国人指導助手（ALT）そして児童がどのように関わり合いながら英語を学び教えているか」ということについて明らかにし、より効果的なチームティーチングの方法について示唆することである。調査の結果、学級担任、ALT、そして児童の三者は、対話者の明白な理解構築の為、様々な方法や言語的資源を使いながら、互いに協力し英語学習を進めていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国際化に伴い、日本の公立小学校では、2011年から小学校高学年を対象に週一回の英語活動が必修化され、2020年度から高学年における英語の正式教科化、中学年における英語活動の必修化が始まった。こうした背景を踏まえ、小学校における英語教育の機会が今後更に増えることから、日本の小学校英語教育における教室内のインタラクションを録音分析し、学級担任とALTのより効果的なチームティーチングの方法および教師と児童のより効果的な英語授業中の関わり方について探究することは非常に重要な課題である。

研究成果の概要（英文）：This study investigates how homeroom teachers (HRTs), assistant language teachers (ALTs), and pupils communicate with each other to achieve mutual understanding in a Japanese public primary school. The results of the study show that the HRTs, the ALT and the pupils utilize various ways, using various linguistic resources available such as English, Japanese, and onomatopoeia to construct interlocutors' clear understanding.

研究分野：外国語教育（特に小学校英語教育）、談話分析、会話分析

キーワード：小学校英語教育 教室談話分析 会話分析

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

国際化に伴い、英語使用が世界中に広まっている状況下 (e.g., Crystal, 2003; Graddol, 2006)、英語は国際社会の中で「基本的なスキル」(Graddol, 2006, p. 72)と見なされ、英語教育充実は最も重要な課題の一つであるとされている(e.g., Graddol, 2006; MEXT, 2017)。この状況を踏まえ、日本を含む多くのアジア諸国で小学校での英語教育が開始された。文部科学省は、2011年に日本の公立小学校の5・6年生に対し「外国語活動」として英語教育を開始、そこでは学級担任とALTによるチームティーチングの指導形態が主に採用されている(Kobayashi, 2009; MEXT, 2018)。本研究は、日本の公立小学校の英語授業において、学級担任、ALT、そして児童がいかに協力してコミュニケーションを取りながら英語を学び、教えているか、ということへの大きな関心に端を発している。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「日本の公立小学校の教室内で、学級担任、外国人指導助手(ALT)そして児童がどのように関わり合いながら英語を学び、教えているか」を、実際の教室での三者のインタラクションを会話分析的・教室談話分析的手法で分析、明らかにし、これにより小学校英語教育の更なる充実に貢献することである。国際化に伴い、日本の公立小学校では、2011年から小学校高学年を対象に週一回の英語活動が必修化され、2020年度から高学年における英語の正式教科化、中学年における英語活動の必修化が始まった。こうした背景を踏まえ、小学校における英語教育の機会が今後更に増えることから、日本の小学校英語教育における教室でのインタラクションを録音分析し、学級担任とALTのより効果的なチームティーチングの方法及び教師と児童のより効果的な英語授業中の関わり方について探究することは非常に重要な課題である。

3. 研究の方法

本研究は、ケーススタディーやエスノグラフィー等のデータ収集方法、及び会話分析・談話分析の質的研究方法を取り入れた。本研究では、申請者が補助教員として2013年度まで地域の小学校で授業中の支援をしながら実地調査を行った。具体的には、授業観察及び教室での学級担任・ALT・児童の授業中の発話の録音分析をすると同時に、学級担任・ALTに対しインタビュー調査等を行った。加えて、2020年度の小学校高学年における英語正式教科化に向けての移行期間である2018-2019年度に、「高学年における教科としての英語授業の中で、学級担任、ALT、そして児童の関わり方や英語教育に対する考え方にどのような変化があるのか」ということについて追加調査を行うため、研究対象校へ再び赴き、データ収集・分析を行った。録音した会話データは、会話・教室談話分析的方法を用いて文字起こし分析された(e.g., Hutchby & Wooffitt, 2008; Walsh, 2006)。

4. 研究成果

(1) 研究結果の概要

本研究の結果、学級担任、ALT、そして児童の三者は、対話者の明白な理解構築の為、繰り返し(repetition)等の方法を使用し、日本語、英語、オノマトペ等の言語的資源を使いながら、時には沈黙(silence)により相手の面子(face)を保ちつつ、足場掛け(scaffolding)や修復(repair)を行い、互いに協力し英語学習を進めていることが明らかになった。以下にデータ分析結果を簡潔に報告する。

教室談話分析的アプローチによるデータ分析結果

本研究ではまず、教室談話分析的アプローチによるデータ分析を行い、学級担任、ALT、そして児童たちが、いかに談話標識などの言語資源を使用したり、効果的にスキヤフォールディングや対話者の第一言語を使用したりしてコミュニケーションを図り、理解しているかを精査した。また、教師対児童、及び児童同士のインタラクションのプロセスを詳細に、且つ体系的に分析する為、社会文化理論に基づくスキヤフォールディングの分析も含めた。その結果、談話標識は主にALTにより使用され、児童の注意喚起や、次の活動に移るための提示、児童や学級担任の返答への応答、且つ/又は確認の機能を持つことが判明した。第二に、スキヤフォールディングは、答えを引き出し(学級担任)、重要な点を示し(学級担任とALT)、児童のフラストレーションをコントロール(学級担任とALT)、ALTの発話を日本語訳し、仲間の理解を深める(児童)為に使用されていることが明らかになった。第三に、ALTによる日本語使用は、児童の注意を引き、答えを引き出し、児童が英語で答えるよう激励し、児童の発言を明確化、理解確認、また、学級担任及び児童に依頼をする為に行われていることが判明した。一方で、学級担任による英語の使用は、指示、児童のしつけ、ALTの発話の繰り返しを用いた児童指導、激励、及び称賛の為に使用されていることが判明した。これらの調査結果は、学級担任とALTが共同的に児童の明確な理解を確保し、ALT又は学級担任が対話者に対する歩み寄りを示す為、様々な方法を使いながら児童たちの言語学習を支援していることを明らかにした。

会話分析的アプローチによるデータ分析結果(繰り返しと沈黙、及び修復の使用)

本研究では次に、会話分析的な視点から、本研究の調査の中で頻繁に観察された繰り返しと沈黙の使用に着目した。本研究のデータでは、繰り返しはALTと学級担任により、児童の明確な理

解の確保、児童が英語を話すよう激励、児童の発言の確認を行う為に使用されていることが判明した。一方で、沈黙は児童により使用され、ALTの発言の不理解や、英語使用の活動への自信のなさを示し、対話者の面子を保ち、頷きによって理解を示すことにより生じた沈黙であることが判明した。相手の顔を立てる為の沈黙は、児童に加え学級担任によっても、ALTに対し使用されていることが判明した。

また、本研究では、会話分析的視点から修復(repair)も精査した。本研究のデータで、Schegloff他(1977)による修復のいくつかのタイプが観察されたが、本研究の教室のコンテキストに即した修復のタイプも観察された。まず初めに、自者修復について分析を行なったが、本研究では、児童の自己修復開始後、ALTが明確化を図りながら修復の完結を行う事例も観察された。次に、本研究では、他者開始の修復を精査し、ALTが児童の発話修復を開始した際は、児童に修復を完結させるケースが大半であるが、状況によりALTが児童の発話を直ちに修復する事例(他者開始他者修復)も見られた。また、ALTが学級担任の発話の修復を開始した際には、疑問形を使用し相手の発話の修復を試みるなど、相手の面子を保とうとする修復が行われていることも判明した。一方で、本研究では、ALTが日本のコンテキストについての知識を共有していなかった為に児童の発言の修復ができなかった事例も観察され、地域コンテキスト特有の知識の共有の大切さについても議論された。

(2)今後の展望

今後の展望としては、2020年度からの高学年における英語正式教科化及び中学年における英語活動必修化により、学級担任、ALT、そして児童の教室内での関わり方や英語教育に対する考え方に、高学年での正式教科化及び中学年での英語活動必修化以前と比べどのような変化及び課題があるのかを、実際の教室内インタラクションの観察・録音・分析、及び学級担任とALTへのインタビューにより明らかにしたい。また、正式教科化により英語の読み書き及び成績評価が加わったことで、児童の中に英語に対する苦手意識や不安が生じていないか、ということについても明らかにし、もしも苦手意識が生じている場合、学級担任やALTが今後どのように児童と関わりながら英語の授業を行うべきか、ということも検討したいと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Ayano SHINO	4. 巻 26-2
2. 論文標題 Collaborative Use of English and Japanese by HRTs, ALTs, and Pupils in English Lessons in a Japanese Primary School	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院教育学研究科紀要 : 別冊	6. 最初と最後の頁 217-230
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) http://hdl.handle.net/2065/00061754	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ayano SHINO	4. 巻 27-2
2. 論文標題 Effective Use of Scaffolding in English Lessons in a Japanese Primary School: A Classroom DA Approach	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院教育学研究科紀要 : 別冊	6. 最初と最後の頁 239-251
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) http://hdl.handle.net/2065/00065351	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件/うち国際学会 5件）

1. 発表者名 Ayano SHINO
2. 発表標題 An Analysis of Repair in English Lessons in a Japanese Primary School
3. 学会等名 The 57th JACET International Convention (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ayano SHINO
2. 発表標題 Primary English Team Teaching in Japan: An Analysis of Code-switching during Lessons
3. 学会等名 The 44th Annual International Conference on Language Teaching and Learning (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ayano SHINO
2. 発表標題 An Analysis of ELF Interactions in English Lessons in a Japanese Primary School
3. 学会等名 The 8th Waseda ELF International Workshop and Symposium (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ayano SHINO
2. 発表標題 Effective Use of Scaffolding in English Lessons in a Japanese Primary School: A Classroom DA Approach
3. 学会等名 談話行動研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 志野 文乃
2. 発表標題 公立小学校における英語授業のインタラクション分析～repetition(繰り返し)の効果的な使用を中心に～
3. 学会等名 日本児童英語教育学会 (JASTEC)第40回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ayano SHINO
2. 発表標題 The Use of Scaffolding in Primary English Lessons
3. 学会等名 The 45th Annual International Conference on Language Teaching and Learning (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ayano SHINO
2. 発表標題 English Team-Taught Lessons in a Japanese Primary School
3. 学会等名 The 46th Annual International Conference on Language Teaching and Learning (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Ayano SHINO
2. 発表標題 Face Saving among Homeroom Teachers (HRTs), Assistant Language Teachers (ALTs), and Pupils in English Lessons in a Japanese Primary School
3. 学会等名 第3回JAAL in JACET学術交流集会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Mayu Konakahara and Keiko Tsuchiya (eds)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 358
3. 書名 English as a Lingua Franca in Japan: Towards Multilingual Practices	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----